

【シンポジウム】

長野県南部と岐阜県東部のフロラの比較

今回は愛知、岐阜両県の植物について特に深く調査され長野県も見られる名古屋市の井波一雄先生をお招きしてお話をうかがった。井波先生は心よく私共の希望を入れられて寒い松本までおいでくださった。ここに改めて先生に御礼申上げる。以下先生のお話と討論の内容を抄録するが誤りがあればそれは私の責任である。討論の項で○印は会員の発言、◎印は答である。
＜話題提供 井波一雄氏＞

私が愛知県に次いで特に調査の足をのばした岐阜県は東・中・西に大別されているが、これは植物を見るにもよい。伊那谷では暖帯的なものが割合上流まで上っているが、木曽谷では多くのものは南木曽辺に止まっている。伊那谷では天竜川が大きく南北の方向にまっすぐに流れ谷が広がっているが、木曽谷では両側から山がせまって谷が狭く木曽川が曲りくねって流れていることが木曽谷入口の南木曽辺で暖帯のものとめている要因となっているのではないか。

南木曽辺は夏大雨のある所でヒノキはこの夏雨で育っている。ここは花崗岩のがらがらしている山地であるが雨を必要とする植物は少しは他の条件が悪くても、こういう雨の多い所に育つものである。

天竜川では佐久間ダムのできる前は、あの辺にクルマシダ、ルリミノキ、ミカワシライトソウなど紀伊半島の南部でなければ見られないようなもの、コミヤマスマミレのように湿気を必要とするようなものがあり、両岸にはあらゆる種類のカシ類がありシュロも野生状態であった。

この方面ではこういう状態が伊那谷までさかのぼることができるのではないか。

着生ランは伊那谷では散漫としているが南木曽辺には集中的に多くの種類が報告されている。こういう空中湿度の高い所は梅の産地ともなるが、着生ランはこういう一種の袋小路のような所に集中していて、ここより多いと思われる南の東濃方面には全然見られない。珍種モミランにしてもこれより南には全然ない。

これは湿った気流が東濃の上空を通過して南木曽の山にぶつかって大雨となるからで、坂下辺から南木曽辺にかけての植物分布はこういう気象条件と地形とに係わりがあると思う。暖帯的なものは川に沿って上っているが平野部を通りすぎて上流の壁のような所に温雨量の総和として分布しているようである。西濃を流れる掛斐川でも、はるか奥の雪の深い所にハナミョウガ・ヤノネシダ・イチイガシが上っている。

着生ランの止まる所にはカシ類・シキミ・ベニシダ・イノモトソウ・マメズタ・カニクサ・ナキリスゲなどもとまる。ムクロジ・ゴンズイは愛知県には多いが長野県では木曽谷・伊那谷に少しあるだけである。スルガテンナンショウは木曽谷では寝覚床まで上っているが西は木曽川を越えない。これもカシ類・ベニシダ・ウラジロに結びつくようである。岐阜県にはスズカアザミがあって三重県にもはいつているが、これも大体スルガテンナンショウと同じような所にある。マキノスマミレもこの県では大体これと結びつき、コバノミツバツツジも大体同じであ

るがモチツツジはこれより少し広いようである。

全国的に暖帯的なものは湿気の高い谷間を川上に上っているようであり尾根には北の寒い所のものが下ってきているのが一般の傾向である。県境の高地を長野県から岐阜県へ下ってきているものを拾ってみる。段戸山で発見されたダンドタムラソウは恵那山にあるが、ここも自然破壊が進んでいるので、その標本は貴重である。ツルツゲは御岳辺では普通の形かと思うが岐阜県は全部ホソバツルツゲとなっていて阿寺山地の付知辺がとまりである。サヤマスケも阿寺山地までで、これから南や西にはない。カカリア属には変化があるがオクヤマコウモリの形が恵那山の高所に出て抱茎しない形のものはない。コウジシヤマハッカも恵那側にきている。ウラジロカガノアザミは木曽川を挟んで付知と恵那山方面に広がっている。

東濃方面には完全な高山性のものはない。高地のものとしてはマイズルソウ・ツバメオモト・サンカヨウなどがある。ヒメスノキは恵那山の高地にあり長野県に普通のヤマブドウは山奥に僅かである。クロツバラは中津川辺の湿原に、東からきたセキヤノアキチヨウジは本宮山・茶臼山の麓・恵那山南麓の川上の線までで、これから西はアキチヨウジである。ハスノハイチゴは王滝から恵那山の南までであるが、ずっと南の石巻山にあるというのは疑わしい。ズタヤクシユ・ヒメイチゲも東濃にきている。ハナチダケサシは奥三界山の西面まできているが、ここにはウラジロ・ベニシダも上ってきて小形ながら生存している。ウラジロウツギは西のものであるが東濃や愛知県東北部山地に点々としている。

湿気を要求するシラヒゲソウが瑞浪市の湿地

にあるが、雨の少い豊田市にもあることはふしぎである。乾いた所にあるイブキジャコウソウも豊田市にあり、とんで伊良湖岬にもある。ヤマナギランは愛知県ではただ一ヶ所茶臼山にあったが牧場となった今は見られない。ここにはコイチヨウラシ・コフタバラン・ミヤマヌカボシソウ・ウラジロモミ・クロベ・セリバシオガマもある。

阿寺山地の県境尾根にはハコネギク・ミヤマウイキョウがある。木曽に多いマルバノキは木曽川の両側に分布し飛騨・福井県に及んでいる。これのある所は黒雲母花崗岩に限られているが分布の末端では小さな分布要因にも支配されるようだ。千葉県に多いサクライカグマは矢作川上流にあるが、これは花崗閃緑岩の所にしかない。

特殊な所として中層湿原とみられる湿原が土岐市から南に延び東に折れて浜松辺に及んでいる。ここにはシデコブシ・ヒトツバタゴ・ミカワシオガマがありミカワコバイケイは30mの低地にもありミカワシンジュガヤ、木曽にもあるヘビノボラズ、最近わかったミコシギクのほかヤチシャジン・ビッチュウフウロ・シラヒゲソウ・サクラバハノキ・長野県にないイシモチソウの他ミミカキグサ・クロツバラ・カザグルマ・ミヤコイバラ・スイラン・クロミノニシゴリ・コムラサキ・サワシロギク・マアザミ・木曽にもあるハイチゴザサがある。またシラタマホシクサもあってこれは木曽川をこえて四日市まで行っている。霧ヶ峯にもあるアサヒラン・キリガミネトウヒレンは浜松辺まで行っている。

乾燥地には大陸系のウンヌケ・ヒゴタイがあ

り、モンゴリナは庄内川に止まり、ミズナラはない。

裏日本的なものとしてはオオカニコウモリ・オオタチツボスミレが雪深い西濃から白川村にタイミンガサが県北部に、ヒメモチは伊吹山から更に南下して御在所岳にあるほかエゾユズリハ・ハイイヌツゲ・スミレサイシン・ボタンネコノメ・アカミノイヌツゲもあって、あるものは思いがけない所でも見られる。

ミズゴケ湿原では下が粘土層になっていて水を下に通さないため夏も冷たい水が流れていてコバイケイソウも生きることができる。水分の少なくなった所にはヌマガヤが育っている。

＜討 論＞

○ 下伊那にはキバナイカリソウがあり木曽の南部にはミヤマウメモドキがある。これは共に裏日本のものであるが美濃ではどうか。

◎ ミヤマウメモドキは岐阜県全域にある。イカリソウは確実に分類されていないが東部では全部白花で三重県に及んでいる。赤花は西濃の深雪地にある。

○ ミカエリソウが木曽にあるという人もあるが美濃ではどこにあるか。

◎ 北限として確認しているのは八百津であり愛知県では本宮山が唯一の産地である。

○ 積雪と植物分布とは関係が深いが岐阜県内では、どのようになっているか。

◎ 1月、2月の積雪が100 cmを越える地域では裏日本系の植物が多く、200 cmを越えると益々顕著になりタイミンガサも出る。

○ 雪田植物群落を形成するイワイチョウ・シヨウジョウスゲ・ハクサンコザクラ・タテヤマリンドウ等は北アルプスを除いては分布は

どうか。

◎ 雪田植物群落としての定義はわからないが白山山系の1200~1600 m付近の尾根にブナ・チシマザサ群落にみられるのと天生峠のチシマザサ群落中にヒメシャクナゲ・ホロムイソウ・サギスゲ・ワタスゲ・イワショウブ・タテヤマリンドウ等の育つ湿原がある程度である。

○ 愛知県の作手の湿原と恵那・豊川辺の湿原とは景観上当分の違いがあるか。

◎ 作手湿原は沼が埋まってできた湿原で、その北の阿蔵にある埋木は絶対年代で700年とみられ、泥炭上に湿原が形成されているのでサギスゲ・ミコシギクが生育し、ヤチシャジン等古い植物が生育している。恵那方面の湿原は粘土層の上を湧水が流れて湿原を作っているので種類にも相当の違いがある。

○ ササについては

◎ 雨が少く雪も少く夏は照りつける所にもネザサが育つ。ミヤコザサは尾根の風の吹きつける所、表土の深い所に、スズタケは谷間で、表土の浅い所にあるようだ。チマキザサ・チシマザサは北の深雪地にある。

(奥原弘人 記)